

## ●イフンケの展示 近況とご報告

皆様のご協力のおかげで、いよいよ開催いたします。  
震災後の影響はながびき、制作ペースは思うように進んでおりませんが、松江展の出品を果たし、成功を取めました。  
東京展は現在の状況を見て頂くのが目的の展覧会ですので、作品数が少ない場合も予定通り開催いたします。  
皆様のあたたかいご理解とご支援をお願いいたします。

9月13日(火)～18日(日)  
「東北一神さまたちとの復興」展  
NHK ふれあいギャラリー (東京・渋谷)  
10am-6pm (最終日4pmまで) 入場無料  
TEL 03-3481-5614  
出品・イフンケ(人形)、伝統切り紙細工\*(千葉惣次コレクション)  
\*大船渡の神社の切り紙を予定しています。  
問 TEL 042-395-7547(HAZEKI office)

**会期中イベント**  
●チーム・コヤアラ主催 第2回コヤアラ・フォーラム  
「ランチ・トーク」イフンケと千葉惣次氏を囲んで  
9月13日(火) 正午～2pm  
会場近くで昼食を頂きながら、お二人のお話を伺います。  
お一人予算2000円前後。参加ご希望の方は、9月9日(金)まで、HazeKI Officeまでお問い合わせ下さい。  
●出品者によるフロア・レクチャー  
9月13日 3pmより 無料・予約不要

イフンケのために国内外から寄せられた支援金が8/25時点で146,492円となりました。この貴重な資金は、イフンケと相談のうえ9月に東京で行われる「東北一神さまたちとの復興展」の費用にあてさせていただきます。皆様のおかげで、イフンケの念願の展示が開催され、本人もオープニングのための上京することができます。ご支援やご協力で、心から感謝申し上げます。また、ウェブサイトなどで宣伝にご協力頂いている皆様にも、深く御礼申し上げます。



## チーム・コヤアラからのお知らせ

### ●情報募集

皆様からコヤアラの会員にお伝えしたい情報、ご意見などありましたら、メールや郵送でお送り下さい。随時募集しております。

●チーム・コヤアラのツイッター  
通信やブログで伝えきれない情報、つぶやきを随時更新しております。



●チーム・コヤアラのウェブサイト  
<http://www.ab.auone-net.jp/~koyaala/index.htm>

リニューアルしました！  
ぜひ、ご活用下さい。  
イフンケの「東北一神さまたちとの復興展」ウェブサイトも新設しました。  
「コヤアラ通信」バックナンバーもダウンロードできます！  
※展覧会情報のブログもよろしく！  
<http://www.ab.auone-net.jp/~koyaala/koyaala-blog.htm>



## ● Art of the Dolls (ロシア・モスクワ)

10月28日(金)～30日(日)  
マネージ国際展示会場 (モスクワ)  
・チーム・コヤアラから、以下の方が出品されます。  
レプンクル・稲田敦・Noe・くるはらきみ・Sakuya(順不同・敬称略)

・「東北一神さまたちとの復興展」ロシア版も併催。  
イフンケの作品とともに、福島市在住の杉田明志さんの作品も展示されます。震災からの復興への祈りとメッセージとともに展示いたします。  
写真は杉田さんの「和気虫広」。  
作者説明：  
「奈良時代、道鏡が天皇になろうという野望を阻止した和気清麻呂のお姉さんです。後に尼になり、80数名の戦争孤児を集めて養ったと伝えられています。聖母マリアが子供たちをケープの中に迎え入れる姿が西洋彫刻にあります。日本のマリア様、というイメージで作りました。」



※また、大竹京さんと山岸伸氏の写真作品も出品されるそうです。

**コヤアラ・クラブ入会条件**  
入会金なし 年会費：2000円 (更新時に2年分一括払いの方は3900円となります。) 年4回(3・6・9・12月)のチーム・コヤアラのニュースレターとDM便が届きます。

**お申し込み方法**  
年会費2000円を以下の方法でご送金ください。  
[郵便振替] 通信欄に「コヤアラ入会」とお書きください。  
送金先「口座番号」00140-7-358370 「口座名」チーム・コヤアラ  
\*ご入金を確認できたらチーム・コヤアラよりハガキで受領証と会員証を兼ねたお知らせをお送りし、次の号から「コヤアラ通信」をお送りします。更新時には、有効期限内の最後の号を発行するときに、更新のお知らせを同封いたします。

**DM同封希望の方**(発行月から3ヶ月の間に展覧会を予定されている方)  
事前に枚数などお問い合わせの上お申し込みください。同封DMは発行月の前月20日にチーム・コヤアラ必着でお送りください。  
同封料金 コヤアラ・クラブ会員：2000円 一般(非会員)：3000円

**紙上展応募の方**  
会員の人形作品の写真を受け付けております。  
8号メ切 2011年11月10日(必着)  
以下を下記まで、郵送かメールでお送りください。  
作品写真2~3点(全体・アップ・裸形) サイズ：ハガキ大。  
「会員番号」「作家名」「タイトル」「素材」「サイズ」他、簡単なコメントなど。  
\*何点でも応募できますが、誌面の都合上掲載はお一人1点になります。  
\*応募作品はウェブ上で公開されることもあります。(講評は紙面のみ掲載)  
\*応募書類は返却いたしません。

**個人情報について**  
頂いた個人情報はチーム・コヤアラの業務委託を受ける HAZEKI office が厳重に管理します。名簿はチーム・コヤアラのニュースレター発送に使用させていただく他、チーム・コヤアラの趣旨に沿ってDMクラブ会員にとって有意義と判断した情報を伝達する以外には一切使用せず、チーム・コヤアラ以外の第三者が閲覧、使用することは一切ありません。

**各お申し込み・連絡先**  
チーム・コヤアラ  
東京都東村山市久米川町 3-27-57 HAZEKI office 内  
TEL 042-395-7547 (担当 ハゼキ)  
FAX 042-395-7975  
URL <http://www.ab.auone-net.jp/~koyaala/>  
Email [team\\_koyaala@yahoo.co.jp](mailto:team_koyaala@yahoo.co.jp)

KOYAALA 通信 編集責任者 羽関チエコ (HAZEKI office)  
©KOYAALA TSUSHIN 2011, printed in Japan 本紙記載の記事・写真の無断使用・転載を禁じます。



# KOYAALA 通信

No.7  
Sep. 1  
2011



「KOYAALA 通信」は、チーム・コヤアラがコヤアラ・クラブ会員に発行するニュース・レターです。年4回発行 発行日(予定) 3月1日、6月1日、9月1日、12月1日

## 「没後30年 平田郷陽の人形展」をみて

没後30年。  
人形師平田郷陽が戦前戦後の大きな時代のうねりのなかで直面した問いは、今なお普遍的で、繰り返され続けている。  
人形をめぐる「東洋と西洋」「伝統と近代」「美術と工芸」「職人と作家」等々。  
私たちはなんて懲りないのだろう、それぞれに対する問いを今もまだ、考え試行錯誤し、議論し続けている。  
この106点の郷陽作品を前にしてみると、郷陽一人が成し遂げた仕事の道のりに圧倒されるばかりだ。

7月から8月にかけて千葉県佐倉市立美術館で行われていた「没後30年 平田郷陽の人形」は、今年の5月の静岡県の三島市の佐野美術館と、全国でも2箇所で開催されただけであった。  
平田郷陽の生涯を追って展示された106点の半数以上が個人蔵。郷陽作品は、回顧的な人形展では横浜人形の家や国立近代美術館などの収蔵作品が度々出品されるが、これだけの個人コレクションが一堂に会し公開される機会は滅多にない。本展の貴重さは、郷陽の名を知る人ならば容易に思い及ぶことだろう。

1903年(明治36年)生まれの平田郷陽は、12才から人形作りを始め、父の死により弱冠21才で二代目平田郷陽を襲名した。と、同時に8人の家族の生活が彼の肩にかかってきた。彼にとって人形作りとは、まずは理想や理屈よりも先に、生活の糧を得る手段だったのである。そのためには、技術に磨きをかけ、表現のモチーフを得るのに、日常生活や寓話をはじめ東西の美術、舞踊、能などありとあらゆるものを観察し、貪欲に吸収していったと想像できる。

生き人形、マネキンや節句人形の製作を経て、1927年(昭和2年)に公募されたアメリカへの答礼人形に選ばれたのをきっかけに、業界で郷陽の評価が高まる。翌年には人形の作品研究と発表を目的に白澤会を結成した。

平田郷陽の人形を見ていると、彼が生きた時代において人形について考え得ることは、丁寧に思考し尽くされた感がある。  
徹底的な写実描写、関節構造、平面画の立体化、人形におけるヌード表現、フォルムの抽象化等々・・・。

生き人形の興業収入の道が廃れば、室内で飾れるサイズにすつらえたり、節句人形には生き生きとした子供の表情を活写し、時代や風俗の資料ともなり得る衣装人形も遺し、美術展では存在感のあるデフォルメ作品を発表する。

過渡期の作品には、試行錯誤ともみえる跡も窺える。たとえば写実から抽象への過渡期ともいべき作品に、浮き世絵の立体化を試みた「冬の日」や「凧」がある。それら人形の手は、筆者にはまだ生っぽく、生き人形で培った技術が走りすぎているように見受けられる。しかし手だけを見れば、郷陽のつくる人形の手は四谷シモン氏も絶賛するように、完璧な技術と美しさである。後年の「秋韻」や「浮雲」ではそのバランスは、溜息が出そうなほ

ど見事な調和を成している。  
後期の「抱擁」に至っては、デフォルメの木目込み作品でありながら、そのなめらかな指先がしっかりとささえる綿入れ、そのなかの赤子の肌の柔らかさが、驚くほどの実感をもって見る者に伝わってくる。赤子の頬につくつかつかないかくらいの母の唇の柔らかさと湿り気、抱擁する体温。生き人形を知り尽くした郷陽の技術と観察眼、創意が集結した傑作である。(図録の写真はこれを側面からとらえているため、子を抱く母の手の表情は、残念ながら確認し得ない。)

時代は郷陽に人形の行くべき道を何度も問い続けたであろう。西洋の美術や概念を急に取り入れようとして、近代日本は伝統的な工芸に不当な劣等感を強いた。人形は彫刻に比すものではないのに、高村光太郎は人形が劣るものとして位置づけた。

しかし平田郷陽の姿勢は芸術至上主義や時勢に媚びず、日本の美しい人形を作る職人としての自負に貫かれている。

本展の図録でも、学芸員の本橋浩介氏が「郷陽が意識的に作家として立とうとしたというよりは、人形が社会の中でどのように必要とされ、それに応えるか、あるいは、需要をいかに創造するかに関心を持っていたように思える。」と指摘している。郷陽らが貢献した人形芸術運動も、人形作者の間から自発的にわき出たものではない点に言及し、氏の論考は創作人形史を見直す上で興味深い。

今の我々の世代は、郷陽の歩んだ道のりのどれほどの距離まで迫れるのだろうと、思わず諦観を抱いてしまうが、まずはその足跡をきちんと見直すことを始めれば、少しでも前に進むことになる。

(羽関チエコ)

※図録は通信販売可。問：佐倉市立美術館 TEL 043-485-7851



写真上 下図からおこした粘土のひな形。実作品より小さい。立体にした際の効果確かめて本制作に入った。  
写真下 人形は各パーツによって彫り分けられる。素材は桐の木。

コヤアラ・メンバーのご活躍ぶりをご紹介します

# koyaala meets koyaala!

## 長岡哲生さん（島根県松江市）

nagaoka tetsuo

レポート 西村 FELIZ



東京から24時間！朝5時の松江の風景

長岡哲生さんと自分は年は随分と離れているが、人形を世へ発表し始めたのは、ともに2003年。

いわば人形制作における同期生なのだ。同期故に同じ釜の飯を食らいつつ、ひとつの粘土を分け合って制作したり、互いに好きな女流人形作家を告白し合い、共に涙を流した・・・そんな経験はもちろんないのだが、それでも同期というだけで親近感を持つのが人というもの。

そんな心の同期である長岡さんの地元、松江で行う「長岡哲生のフレンズ展」に立川好江さん、イフンケさんと共に、この度出品を呼びかけられた。

「フレンズ展」会場は、島根県松江市の中心にある一畑百貨店。この百貨店は、現社長中村勝輔氏が人形への理解と造詣が非常に深いということもあり、数多くの人形展が行われている。西の人形の聖地とも言える百貨店である。そんな聖地に、展示と共にトークショーを行うべく、JR管内であれば2300円で一日乗り放題という青春18切符を利用し、松江に向かうことにした。

だが、東京駅を始発で発ったにも関わらずその日の最終電車で辿り着いたのは、結局鳥取県の米子までであった。

とはいえせっかくここまでたったの2300円でやってきたのであるから、松江までの交通費はもうビター文払いたくないのが、中南米を旅した元バックパッカーである。米子から松江までたった30kmの距離とのことなので、取り急ぎ歩いて向かってみる。

田舎の見ず知らずの夜道に行くのはなかなかのものがあるが、玄関開けたら2分で強盗というかつて知ったるメキシコとは違い、何を根拠にしているのかは不明だが、島根県は「日本一安全な県」とうスローガンが駅前に掲げられている。なので、車に跳ねられることや道を間違えること等だけに細心の注意を払いつつ、バス停等で仮眠を取ったりし、無事に東京出発から約24時間後の早朝5時に

松江へと辿り着くことが出来た。

そこに広がる朝の松江港の風景はとても美しく、これから始まる展示が良さものになることを予感させる一日の始まりであった。

そんな自分を、優しく迎え入れてくださったのが我が心の同期長岡さんだ。(写真左)



人形作家としての人生を歩む前までの長岡さんは、デザイナーを生業としていた。

だがその際もMacによる現場での作業がメインというわけではなく、チーフデザイナーの立場として、主にプロデューサー的な立ち回りを行うことが多かったとのこと。そんな中、人間国宝である鹿兒島寿蔵さんの紙塑人形との出会いが長岡さんの人生を変える。

その出会いは衝撃的だったらしく、以前から人の形を作ることに興味があったという長岡さんは、それを機に紙塑人形の作り方を基本として本格的に人形制作を開始。

そのタイミングでドールファンタジアという公募展のことを知り、試しに出品してみたところ見事に入選。だが、人形界のことでもよくわからぬまま、トントン拍子で事が進んでいったことに対し、この頃はやや迷いが生じたらしい。

そんな折、一畑百貨店で開催された「女性人形師7人展」に、出品されていた三輪輝子さんに「今後どのようにして人形というものと向き合えば良いか？」を尋ねてみた。すると三輪さんが勧めてくださったのが、当時発行されていた唯一の人形誌であるDFJ(ドールフォーラムジャパン)。

その言葉を受けた長岡さんはその場でDFJのバックナンバーを全て購入し、人形に関する知識や現状、様々な作家の作品や想い等を次々に吸収したそう。

迷いがなくなった長岡さんはその後、DFJ誌上展をはじめ、国内外の展示に次々と出品。そして今回の展示に至るわけだが、その準備は2年前から順調に重ねていたとのこと。

だが、今年の3月のあの震災により人形を制作する意味を改めて考え、制作の手は止まってしまった。すると、森に駆け込んで津波を逃れた子供達の話聞き、止まっていた創作の手が再び動き出す。

いつの時代にも子供達には夢を見て育てて欲しい。そんな夢見る子供をモチーフに、今回の展示のメイン作品である「森の子供シリーズ」は作られていった。そんな森の子供シリーズと共に、個人的に気になったのがうさぎや猫等の動物の人形達。長岡さんには動物の作品を作られるイメージがなかったのだが、出雲大社の因幡の白兎というものがあるせいか松江の人々はうさぎが好きらしく、よく動物は作られるとのこと。表現方法も独特で面白いので、今後も長岡さんにはうさぎ道も突き詰めて欲しいものである。

立川好江さんは関節人形に鉛筆画、布に絵を描いた布絵人形やぬいぐるみ等、ひとりの作家から作られた物とは思えないような多様な作品群を展示。



普段の立川さんの作品のファンとは違った客層の方が多かったわけだが、その独特の表情と雰囲気は、松江の人々にとっては見たことのない新しい可愛さであったらしく、多くの人々に注目されていた。

イフンケさんは被災されたという特異な体験はさておいても、神棚や祭壇等に飾ることを念頭に置き制作されているという人形から発せられる神々しさと可愛らしさは存分に松江の人にも伝わっていたようだ。9月の展示も楽しみである。

そして自分の作品もトークショーと相まって、中南米の世界を多に感じていただけた模様。中南米に興味を抱いていただけたことが何より嬉しい。

ともあれ、四者四様に言えることだが、多くの松江のお客様から「今までに見たことがない」というお声を沢山頂戴した。新たなものを創造しようとしている我々にとってこれほど嬉しい言葉はない。

展示全体の売り上げも予想されていたところの倍近くをたたき出し、松江の人形熱というものも改めて実感できた。

しかしそれも引いては長岡さんが今回の展示にあたって周到な用意をくださったことが最大の要因である。そこにはデザイナーだった頃に、チーフデザイナーとして主にプロデューサー的な役割を果たしていた際の経験が大きく影響しているという。

作家は造ることももちろん大事だが、その作品を客観的に見てトータルでプロデュースすることが大事だと。

故に最近のご自身の活動もさることながら、松江にはない新しい作品と作家を紹介する使命が自分にあるのではないかと、そう考えられているとのこと。

2009年には稲田敦さんとくるはらきみさんとの3人展を行い、今回は自分らを含めた4人展を開催。3年後に計画されているという次の展示でも、また新たな風を松江の地に運ばれるのであろう。

そのようにして松江の地で頑張る長岡さんを自分は今後も応援し協力したいと思う。



(写真上から)  
長岡哲生  
西村 FELIZ  
イフンケ  
立川好江

